RAKUNO GAKUEN UNIVERSITY
酪農学園大学

出会い

No.93 2026. 3.19
キリスト教委員会

「35その日の夕方になって、イエスは、『向こう岸に渡ろう』と弟子たちに言われた。 36そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった」
（マルコによる福音書４章35-36節）

上「現在の夕方のガリラヤ湖」（*Accordance Bible* より転載）/ 下「ガリラヤ湖発掘の舟」（*Accordance Bible* より転載）

この舟はガリラヤ湖で発掘された、長さ8.2m、幅2.3m、高さ1.2mの五人乗り程度の小舟であり、イエスと同時代の前１世紀～後１世紀に位置づけられることから、2-3頁で論じられている「嵐を静めるイエス」の奇跡物語の弟子たちの恐怖の様子が実感できる気がします。

不信から信へ（マルコ福音書４章35-41節）
―― 時代を飲み込む空気に背を向ける ――

宗教主任・循環農学類キリスト教応用倫理学研究室　小林　昭博

未来への門と人生の道

環境共生学類　環境地球化学研究室　吉田　磨

静かな所作が紡ぐ交点 ―意味が見えない時間のために―

環境共生学類自然再生学研究室　千葉　崇

「三愛精神」で『共に生きる』道へ

学園宗教主事　朴　美愛

不信から信へ（マルコ福音書４章35-41節）
――時代を飲み込む空気に背を向ける――

宗教主任・循環農学類キリスト教応用倫理学研究室　**小林　昭博**

40そこで、イエスは弟子たちに言った、「どうしてあなたたちは怖がっているのか。まだ信〔＝信頼／信仰〕を持たないのか」。

（マルコ福音書４章40節［私訳］）

古代世界における奇跡物語

マルコ福音書４章35-41節は「嵐を静めるイエス」と呼ばれる有名な奇跡物語です。現代世界ではイエスが嵐を静めたという奇跡物語は荒唐無稽なお伽話にしか感じられないかもしれませんが、古代世界では奇跡物語は聖者の伝説として人気を博していたジャンルです。同様の状況は現代世界にも通じるものがあり、魔法や魔力を駆使するヒロインやヒーローが活躍するラノベ、マンガ、アニメ、映画などが流行っていることを考えると、奇跡物語は時代を超えた人気のジャンルだと言えます。

この奇跡物語では嵐（風や海）は擬人化され、悪霊のような姿で描かれています。この背後には目に見えない力を畏怖する古代人の姿が垣間見えるのですが、神が自然の脅威を静める逸話は旧約聖書にも繰り返し現れます。

「嵐を静めるイエス」の読解

この物語の中心は冒頭に引用した40節のイエスの言葉にあるのですが、ここでは38節で弟子たちがイエスを「起こす」ときに使われているἐγείρω（エゲイロー）と39節でイエスが「起きる」ときに用いられているδιεγείρω（ディエゲイロー）というふたつの動詞に着目してみたいと思います。

前者のエゲイローは横になっている状態から「起き上がる」ときや座っている状態から「立ち上がる」ときなどに使われる動詞です（マルコ１章31節など）。そして、この動詞は転義的にイエスや死者が「起き上がる」ときに用いられる術語にもなっていますので（マルコ16章６節など）、イエスの復活を表す重要な用語でもあります。

それに対して、後者のディエゲイローはマルコではこの１箇所にしか使われていません。大抵の日本語訳聖書では「立ち上がる」や「起き上がる」と翻訳されているのですが、この語は新約聖書の全用例においても、「目を覚ます」という意味で使われており、「立ち上がる」や「起き上がる」という意味で用いられる動詞ではありません。

「嵐を静めるイエス」の再読

では、次にἐγείρω（エゲイロー）とδιεγείρω（ディエゲイロー）の意味の違いに留意しながら、この奇跡物語を再読してみたいと思います。湖上の嵐で舟が浸水して焦った弟子たちは38節でイエスを起こそうとします。ここで使われているのはエゲイローです。ですから、弟子たちはイエスを起き上がらせようとしているということです。舟上でよろめく弟子たちがイエスを立ち上がらせることは困難ですから、膝をついて必死にイエスを起き上がらせようとしている情景が浮かんできます。

そして、39節でイエスが目を覚ますのですが、ここで使われているのはディエゲイローです。ですから、イエスは起き上がったのではなく、目を覚ましたに過ぎません。したがって、イエスは横になったままの状態か、せいぜい上半身を起こした状態で、目だけを開けて、嵐を静めたということです。

このように、エゲイローとディエゲイローの差異に着目してこの物語を再読すると、生命の危機に瀕して動揺している弟子たちとは対照的に、居眠りするほどに落ち着き払っているイエスの姿が浮かび上がってくるのです。

時代を飲み込む空気に背を向ける

この物語において湖上の舟でうろたえる弟子たちの姿は、確たるものを失って右往左往するわたしたちと重なって見えます。そして、嵐が表象する目に見えない「霊」に怯える古代人の姿は、目に見えない「空気」に飲み込まれる現代人の姿を写し出しているかのようです。古代のヘブライ語やギリシャ語では「霊」と「息」と「風」は同じ単語です。その意味では、目に見えない「空気」というものは現代の「悪霊」のようなものなのかもしれません。実際にわたしたちは目に見えない「空気」に怯え、その「空気」に支配され、飲み込まれてしまっているのですから。

しかし、この奇跡物語においてイエスは弟子たちが嵐に怯えて一斉に飲み込まれている「空気」など存在しないかのように居眠りを続け、その「空気」の支配を拒むのみならず、その「空気」に同調させようとする弟子たちの「空気」にさえも背を向けているのです。

まだ信を持たないのか

しかし、イエスは弟子たちのあまりの狼狽振りに痺れを切らし、急に目を開けて嵐を静め、**「どうしてあなたたちは怖がっているのか。まだ信〔＝信頼／信仰〕を持たないのか」**（40節）との言葉を発します。ここで「信」と訳したギリシャ語のπίστις（ピスティス）は、通常は「信仰」と訳されますが、本来の意味は「信頼」です。つまり、神や人に対する「信頼」「信実」「誠実」「まっすぐ」な状態を表します。

したがって、イエスが弟子たちに**「まだ信を持たないのか」**と言っているのは、弟子たちが目の前にいるイエスを信頼していないことだけではなく、弟子たちが相互に信頼し合うことも、協力し合うこともなく、ただただその場の「空気」に飲み込まれてしまっているからです。そして、この状況は「長いものに巻かれる」という諺や「忖度」といった言葉が体現するように、目に見えない「空気」に飲み込まれ、その「空気」に流されている現代のわたしたちが確固たる「信」（信頼・信念・信仰）を持っていないことにも通底すると言えるのではないでしょうか。

不信から信へ

右下の写真（ウィキペディア「アウグスト・ランドメッサー」より転載）は1936年６月13日に撮影されたナチ式敬礼をただひとり拒否するアウグスト・ランドメッサーを収めたものです。1991年３月22日付けの*Die Zeit*誌に掲載され、一躍有名になった写真です。彼はヒトラー独裁政権下のナチ・ドイツにおいて、時代を飲み込む「空気」にまさに背を向けているのです。ランドメッサーが生命の危険を賭してまで、時代の「空気」に背を向けたのは、彼の妻イルマがユダヤ人であったことから、自らの愛と信念を貫いたがゆえに、ヒトラーやナチに対する「忠誠」（信）を拒否したからにほかなりません。

現代世界はこれまでの外交や話し合いによる平和の構築という理念を破棄し、「力による平和」という強大な武力を持つ国家が好き放題に振る舞うことを許す方向に大きく舵を切った感があります。第一次・第二次世界大戦前夜の時代の再来と感じざるをえません。自分とは異なる民族、国家、社会、文化、宗教、思想、主義などをあたかも目に見えない「悪霊」のように忌避する「不信」の「空気」が蔓延する時代の到来です。日本でも「力による平和」を肯定するのみならず、その「空気」に迎合せず、平和憲法の崇高な理念を理想主義や夢物語として蔑むような「不信」の「空気」が蔓延しています。

卒業生、修了生のみなさんを「力による平和」を標榜する「不信」がはびこる社会に送り出さざるをえないことが心配であると同時に責任をも感じています。しかし、それ以上に本学で接してきたみなさんであれば、時代を飲み込む「不信」の「空気」に迎合することなく、人と人とが互いに「信」（信頼）によって繋がり合える世界を一緒に創造してくださるとの希望を持って、みなさんを送り出したいと思います。

未来への門と人生の道

環境共生学類　環境地球化学研究室　吉田　磨

巣立ちに寄せて
―「門」を選ぶということ

卒業・修了されるみなさん、おめでとうございます。この学び舎を巣立つにあたり、昨年の大学礼拝で語った「未来への門と人生の道」というテーマを、改めてみなさんにお伝えしたいと思います。

聖書には「広い門」と「狭い門」のたとえがあります。広い門は誰にでも目につきやすく、社会的成功や承認を求める価値観と結びつくことがあります。現代社会は目に見える成果や効率が重視されがちで、広い門を選ぶことが最も合理的に見える場面も多いでしょう。しかし、その道が必ずしも心の深い満足や人としての豊かさに結びつくわけではありません。

一方で、狭い門は目立たず、時に困難や孤独を伴いますが、聖書はその先を「命に通じる道」と呼びます。みなさんがこれから社会で新たな道を歩むとき、安易な近道ではなく、自らの良心と誠実さに従った“狭き門”を選び取る勇気を持ってほしいと願っています。人生の深さと確かさは、往々にしてそのような道の先にあります。

苦難から希望へ
― 大学生活で見てきた言葉

「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」。

Ｃ１号館の外壁に大きく刻まれたこの聖句を、みなさんは毎日のように目にしてきたことでしょう。講義に向かうとき、研究の合間にふと空を見上げたとき、心にそっと寄り添ってくれた言葉だったのではないでしょうか。

大学・大学院での研究は、成功の連続ではありません。分析が進まない日、データの意味に迷う日、将来への漠然とした不安に立ち止まる日もあったと思います。しかし、苦難の先にある“忍耐”の積み重ねこそが、みなさんを練達へと導いてきました。

練達とは、単なる技術の習熟ではなく、時間をかけて物事の本質に深く通じていくこと。その過程で身についた洞察力は、みなさんのこれからの人生を支える大切な力となっていきます。そして、その先に静かに灯る“希望”は、願望ではなく、歩んできた道のりによって裏付けられた確かな光です。みなさんの中には既に、その光がしっかりと息づいています。

地域と次世代、そして世界とつながる「共育」

私の研究室の教育研究では、これまで流域生態系の観測を通して、地域が抱える環境課題と向き合ってきました。湖沼、湿地、河川、海…、一見バラバラに見える自然の営みは、実は一つの生命の流れとして密接につながっています。流域を総合的に捉えること

で、自然の変化のみならず、そこに根ざす暮らしや産業、その地域が抱える課題や未来の姿が立ち上がってきます。環境の研究とは、自然科学の探究であると同時に、地域社会の明日をともに描く取り組みでもあると深く感じてきました。

こうしたフィールドには、地域の子どもたちと大学生・大学院生が共に学ぶ「共育」の姿があります。子どもたちは湿地の風を肌で感じ、湖のきらめきを見つめながら、次々と新しい問いを生み出します。大学生や大学院生はその姿に触発され、自らの研究の意義を改めて発見し、視野が広がっていきます。教える者と学ぶ者の境界が溶け、世代を越えて学びが循環する――この経験は、地域においても、そして世界のどこに立っても意味を持ち続ける普遍的な価値です。

みなさんの中には、これから地域に貢献する人もいれば、世界に羽ばたき国際的な舞台で活躍する人もいるでしょう。どの場所に立つとしても、相手の文化や価値観を尊重し、その土地の自然と調和しながら学び続けていく姿勢は、必ずや力となります。共に学び、共に育つ「共育」の精神は、どの国・どの分野においても必要とされる普遍的な姿勢です。

道を照らす灯を胸に
― 世界で生きるためのphilosophyとしての三愛精神

詩編には、「あなたの御言葉は、わたしの道の光、わたしの歩みを照らす灯」とあります。学問とは、未来を照らす灯を携えながら歩む旅です。白紙に問いを記し、答えを探す営みは、まだ見ぬ自分の可能性と静かに対話する行為でもあります。大学・大学院で培った知識、経験、そして仲間との関係は、これから歩む道を照らす確かな灯となってくれるでしょう。

そして、酪農学園大学の建学の精神である三愛精神は、学内にとどまる理念ではありません。これは、みなさんが地域でも世界でも、どの文化・社会に身を置いても揺らがない“philosophy＝生き方の指針”です。神を愛するとは、人生の深い意味や倫理性を問い続ける姿勢。人を愛するとは、地域や文化、背景の違いを越えて相手を尊重し、共に生きる力。土を愛するとは、どの土地に赴いても、その地の自然や社会と調和しながら未来を築こうとする態度です。

どうかこれからの人生で、“広い門”の誘惑に流されず、自らの思いと誠実さに従って“狭き門”を選び続けてください。そして、この三愛精神というphilosophyを胸に、それぞれの場所で地域を、そして世界を、希望で満たす存在となってください。

みなさんのこれからの歩みに、光と祝福が豊かにありますように。卒業・修了、本当におめでとうございます。

静かな所作が紡ぐ交点
―意味が見えない時間のために―

環境共生学類自然再生学研究室　千葉　崇

決まった時間に、決まった行動を取る。それは一見、とても窮屈で退屈で、自由のない決まり事や生き方のように聞こえる。同じ時間に起き、同じ道を歩き、同じことを繰り返す日々。刺激もドラマもない、味気ない日常。でも不思議なことに、私はその「繰り返し」の中で、少しずつ自分を取り戻していく。言い方を変えれば、調子を整えていくのだ。

朝、決まった時間にカーテンを開ける。夜、決まった時間にスマホを置く。たったそれだけの行動が、心に「ここに戻ってきていいよ」と合図を送る。私の心は、とても気まぐれで臆病だ。不確かな予定、変わり続ける環境、先の見えない未来に、知らず知らずのうちに疲れている。そんな心にとって、決まった時間に決まった行動を取ることは、小さな約束を自分自身と交わすことなのだろう。「今日も守れた」という感覚が、自己肯定感になる。誰かに褒められなくても、大きな成果が出なくても、自分との約束を果たしたという事実が、静かに心を支えてくれる。

大きな夢や目標は、時に人を押しつぶす。でも、毎日同じ時間に同じ行動を取ることは、人生を無理に変えようとしなくても確実に未来を形作っていく。派手じゃなくていい。完璧じゃなくていい。ただ、今日も同じ時間に、同じ一歩を踏み出す。その積み重ねが、いつの間にか「自分はしっかりと生きている」という実感に変わるだろう。

決まった時間に、決まった行動を取る。それは自分を縛る鎖ではなく、迷わず帰ってこられる心の輪郭を確認する所作なのだ。人生は繰り返しのようで、決して同じ瞬間はない。過去は満たされず、現在は儚く、未来は尽きない。だからこそ、小さな行動の積み重ねが、ある未来を切り開く手段の一つとなる。

聖書や礼拝は、関わらない人からすれば、分厚く、重々しく、厳格なものに映るかもしれない。祈りもまた、潔癖で静謐な行為というイメージを持たれやすい。それゆえに、キリスト教は日常からやや遠いもののようにも思われる。だが例えば、聖書を「守るべきことの回答集」ではなく、「問いを投げかける言葉の集まり」として捉えると、距離感は変わらないだろうか。毎日読む必要も、すべてを理解する必要もない。そのときふと引っかかった一節を、その日の出来事と並べて考える

だけで十分だろう。

どんな出来事であっても、日常との接点はとても小さい。大事なことは、意味を感じられない日常を、すぐに否定しなくていいという感覚を持てるかどうかだ。何気ない日々に価値を見出すことの難しさは確かにある。でも、それは日々のルーティンと大きく違うものではないだろう。祈ることそのものが尊いというよりも、ルーティンと同じように、繰り返すことで自分に気づくきっかけになり、心を静め、落ち着かせる時間にもなり得る。

祈りを「何かを叶える行為」や「尊い宗教行為」として位置づけてしまうと、それは非日常的な行動になり、日常からの距離が遠ざかる。ここぞというときの神頼みも、同様だろう。

伝統的な祈りでは、同じ言葉を同じ調子で、何度も繰り返すことがある。でもそれは、神に説明するためでも、気持ちを言語化するためでもなく、自分の内側の雑音が一段落するのを待つために近いように思う。だから祈りは、うまく言えなくてもいいし、それが直接何かを変えるものでなくてもいい。ただ「そこにいた時間」が残るだけで十分なのだ。

例えば、祈りをルーティンとして考えてみるのはどうだろう。特別な感情がなくても行い、気分が乗らなくても続き、成果を測らないもの。それでも自意識をもって行う所作であれば、自身の変化が、かえって浮かび上がってくる。今日は落ち着かない、今日は言葉が空回りする、今日は何も考えたくない——それに気づくための「ものさし」のようなものだ。

祈りが尊いかどうか、意味があるかどうか、救いにつながるかどうか——それらは、祈りの最中に考えなくていい。むしろ、祈らなかった日と祈った日の違いを、あとから俯瞰して見られれば、それで構わない。祈りは「信仰表明」ではなく、自分を見失わないための静かな所作だ。その理解で関わるのであれば、聖書も礼拝も、無理なく日常の中に置けるはずだ。

さらに、聖書や礼拝をどう位置づけることができるだろうか。例えば聖書を「自分の状態を映す言葉の集まり」、礼拝を「個人のルーティンを社会の中に置き直す場」と考えてみる。一人で静まる時間ももちろん大切だが、他者と同じ言葉や同じ沈黙を共有することで、自分の内面が閉じすぎないことも必要だろう。そうしたとき、聖書や礼拝は「大きな意味を与える書物や場所」ではなく、意味が見えない時間を忘れ、あるいは自分を思い出すための語録や場として、日常の中に置き直すことができるだろう。

新しい日々の中に、ささやかな所作として溶け込み、それを繰り返す中で、わずかに自分の位置や心の輪郭を確かめる。

そのような静かな時間が、それぞれの中にあればと思う。

「三愛精神」で『共に生きる』道へ

学園宗教主事　朴　美愛

皆さん、ご卒業おめでとうございます。今、皆さんはこれからの未来に対して期待と共に不安も抱きながら新たな人生の道を歩もうとしています。その道はこれまでの学びを生かして実践して生きる道でありましょう！

皆さんは在学中には気付かなかったかも知れませんが、いつの間にか、酪農学園の教育の根底であるキリスト教の聖書に基づく「建学精神」である「三愛精神」の「神を愛し、人を愛し、土を愛す」が身に付いているはずです。

それでも、改めて「三愛精神」を心に刻みましょう。「神を愛す」とは、常に真理（聖書）とは何かを追い求め、最善を尽くすことです。「人を愛す」とは、人はみんな尊い、平等であることを知り、互いの違いを受け入れ、他者と『共に生きる』社会をつくり、生きることです。聖書は、「隣人を自分のように愛しなさい。」（マタイ22:39）と言います。「人を愛す」ことは、まず、自分を愛すことから始まるのです。そして、「土を愛す」とは、「土」を始めとして自然・環境などの被造世界を管理・保全し、すべてのものが『共に生きる』持続可能な社会・世界を実現して生きることであります。

酪農学園大学で、「三愛精神」を学んで来られた多くの卒業生が、新しい価値観と世界観に導かれて、日本は勿論、世界中で献身的に働いているのです。皆さんも今後その一人になることには違いないと思います。勇気と希望を持って、失敗を恐れず、日々を誠実に歩んでください。皆さんのこれからの歩み、新たな人生の道に神さまの祝福が豊かにありますようお祈りします。

あとがき

『出会い』93号（卒業式号）をお届けします。人生には順風満帆なときもあれば、嵐のように困難なときもあります。卒業生・修了生のみなさんの門出にさいして先生たちが示してくださった聖書の言葉、そしてその聖書の言葉に基づいて贈ってくださった心のこもったメッセージが、これから社会に巣立っていくみなさんを力づけてくれると信じています。（A.K.）

酪農学園大学キリスト教委員会
〒069-8501　北海道江別市文京台緑町582番地
Tel. 011 － 386 － 1111（代表）

Japan Institution for Higher Education Evaluation
JIHEE since 2004
UNIVERSITY
2020.4-2027.3
酪農学園大学は、2020年度（公財）日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価において大学評価基準に適合していると認定されました。
〔酪農学園大学公式サイト〕